



宇都宮の礎と築いた 幕末・明治維新の 隠れた偉人

1 歴史
に学ぶ

NHK大河ドラマで坂本竜馬がとりあげられたことで、幕末・明治の時代にスポットが当たっています。現代日本の基礎が創られた時期だけに、人々の関心も高いようです。本誌でも、宇都宮の幕末・明治の知られざる偉人たちをご紹介します。



幕末・明治の 宇都宮の地域力

「激動の明治維新」と「宇都宮」。何となく結びつかないなあ——そんな感想を持つ方が多いのではないだろうか。けれども宇都宮は、戊辰戦争の戦場になった土地です。宇都宮城が戊辰戦争で焼失したことは、最近では広く知られています。この

戦闘には、あの土方歳三も旧幕府軍に参加し、銃弾により足を負傷しています。宇都宮はもともと奥州街道と日光街道が分岐する交通の要衝。東北への玄関であり、日光の入り口でした。ですから、城下町や門前町としての性格のほかに、宿場町でもあったのです。市内に水路や道路も整備されていましたから、商業都市の役割も果たしていました。

から来ていることは有名ですが、それはとりもなおさず、宇都宮全体が活発な商業都市であった証拠でもあります。定期的な市も開催され、その名残はお正月の初市などに見ることができます。

善次郎（酒造・質）、丸田源蔵（質・油）などが挙げられます。今回紹介する一人、菊池教中は菊池孝兵衛の二代目です。こうした活発な商業活動は、もちろん地域の隆盛につながり、そこから文化も生まれます。学問も盛んになり、文化レベルが向上すれば、ひとかどの人物を輩出するようになります。「寛政の三奇人」の一人、学者の蒲生君平は有名ですが、そういう人物を生み出すだけの教育・文化の熟成

があったことは、当時の宇都宮の高いレベルを物語る証左でしょう。

ちなみに蒲生君平は、あの吉田松陰も私淑した学者で、後の日本の針路にも大きな影響を与えています。

宇都宮は戊辰戦争で大きな被害を受け、また明治維新によって参勤交代や日光社参などがもたらす利益を失いました。今で言えば、幹線道路が新しくできてしまい、かつ観光地が寂れてしまったようなものです。しかし、それまでに集積していた地域力と、その後県庁が宇都宮に設けられたことが、その逆境をはねかえす原動力となりました。特に商業面での隆盛はめざましく（軍都であり、交通インフラ整備が進んだことも大きな要因です）、それが明治・大正・昭和を経て現在にまでつなっています。

菊池 教中

きく

ち

きょう

ちゅう

悲劇の死を遂げた豪商

幕 末の宇都宮を代表する豪商の一人、菊池教中は、関東一円に呉服屋や木綿問屋、質屋、両替屋などの店を構える「佐野屋」の跡取りとして二八二八（文政十二年）に生まれました。

佐野屋はもともと宇都宮の寺町で古着屋・質屋を営んできましたが、そこに婿養子に入った長四郎が新たに日本橋で店を開き、成功を収めました。初代菊池孝兵衛となった長四郎は号を「淡雅（た

んが）」と称し、現在ではその名称の方が有名です。

成功者となった淡雅は、本家佐野屋が衰退してきたこともあり、文政12年に家族を連れて宇都宮に移住、本家に代わって宇都宮藩の御用達をつとめました。

医者の息子だった淡雅は学問に熱心で、多くの学者たちとも交流がありました。そのうちの一人で幕府儒官だった佐藤二齋門下の大橋訥庵（とつあん）を娘の婿養子に迎えたほどです。訥庵は、後に「東の吉田松陰」と呼ばれるほどの尊皇攘夷論者となりましたが、彼との関わりが、淡雅の息子・教中の運命を大きく変えていくこととなります。

淡雅は二八五三（嘉永六）年に亡くなり、教中は26歳にして二代目日孝兵衛を襲名、家業を継ぎます。この年、ペリーが浦賀に来航。時代が大きく動き始めました。一八五五（安

一八二八（文政十二年）
一八六二（文久二年）
宇都宮の豪商・動玉家



菊池教中像（栃木県立博物館蔵）

政二）年3月、江戸に大地震が起こり、佐野屋の江戸店も焼失しました。これを機に教中は、新たな道を模索し、宇都宮で新田開発に力を注ぐこととなりました。

宇都宮藩の家老・間瀬和三郎や、訥庵門下の勘定奉行・縣六石の支援を受けて岡本や桑島で新田開発を行ったところ順調に成果を挙げ、後には藩主自ら出馬して工事を奨励するほどになりました。こうして、藩のバックアップによる新田開発が成功し、教中は従来の「商人」から「新田地主」へと、家業の軸足を移していきます。

その頃訥庵の思想は、尊皇攘夷論への傾注を加速させていました。特に日米修好通商条約の締結から安政の大獄へと向かい、大老・井伊直弼が桜田門外で暗殺された一八六〇（万延元）年の頃から、訥庵の活動は活発になっていき、同志も集まるようになってきました。その時代に多くの学者がそうだったように、訥庵もまた、思索だけではなく行動によって、自らの思想を世に問う姿勢を強めていったのです。

義理の兄であり師である訥庵とともに、教中も行動を起こし始めました。一時は訥庵に諫められるほどのめりこみようだったと言います。彼らを中心とした攘夷の有志たちは、さまざまな蜂起計画を立てますが、いずれも実現には至りませんでした。しかし、それがやがて悲劇につながります。

坂下門外の変の数日前、訥庵は、一橋慶喜（後の第十五代將軍）を擁して挙兵する陰謀に関与したとして逮捕、投獄されます。そして変後、教中もその関与を疑

川村 迂叟

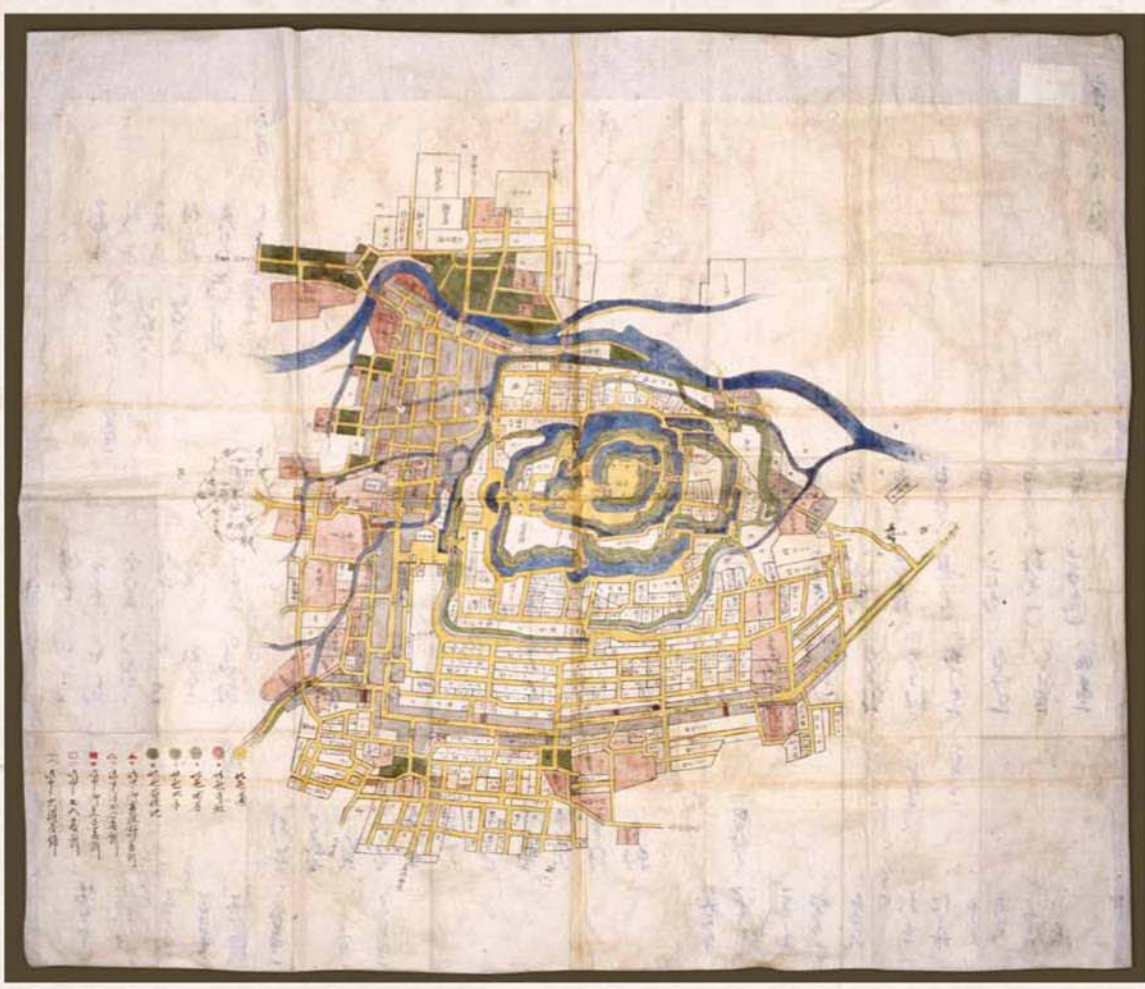
一八二二(文化五年)年、
一八八五(明治十八)年、
江戸の豪商。日本初の機械製糸場
「大崎商舎」を設立。
国立第三十三銀行設立

戸田家を支えた商家が近代産業へ

われ、投獄されてしまいました。彼らを助けるために佐野屋だけでなく宇都宮藩も盛んに活動を行い、赦免を幕府に働きかけました。その甲斐あって、訥庵・教中ともに約半年後の七月に釈放されます。ところが釈放後数日で、二人は相次いで死亡してしまいました。あまりの急死に、幕吏による暗殺説さえ流れたと言います。

川村迂叟(うそう)は、本名を富之といひ、日本橋の豪商の家に一八二二(文化五)年に生まれました。川村家は古くより宇都宮藩主の戸田家と関わりが深く、同家が肥前から宇都宮に移封された際の費用についても援助したほどでした。それだけに、迂叟自身も宇都宮藩との関係が深かったようです。

宇都宮城下地図 (栃木県立博物館蔵)



その打開策として天皇の墓である山陵を修補する計画を立てました。間瀬家老から相談を受けた迂叟はその費用負担を快諾、まず一万五千両を渡したといひます。この山陵修補を行ったことで、その後宇都宮藩は何度も窮地を脱することができました。特に水戸天狗党との関わりを責められ棚倉への改易移封を幕府から命じられた際も、最終的には修補の功績が認められ、まぬかれたのでした。そして、豪商として幕閣とも交流の深い迂叟が、この時もさまざまな支援を行ったことも、大きな力となったのです。



川村迂叟像 (栃木県立文書館蔵)

大崎商舎は従来の養蚕、製糸業が家内制手工業的な性格を有していたのに対し、水力を動力とした本県初の機械製糸でした。一八七四(明治七)年から本格的に機械運転が始まると、従業員も百名を超え生産量は大幅に伸びました。一八七八(明治十)年からは蒸気が導入され、工場はさらに拡大。従業員も倍増しました。その輸出向け生産額は、我が国の四〇五%を占めるまでに伸張したといひます。

やがて明治になると、迂叟の家業である大名貸しは成り立たなくなり、新たな道を模索することになります。その時迂叟が選んだのは、養蚕であり、製糸でした。一八六九(明治二)年に石井村(現宇都宮市石井)で養蚕を始めた迂叟は、翌々年から製糸工場を立ち上げ、本県の近代製糸の嚆矢となる大崎商舎(おおしましや)を設立しました。



藩末宇都宮藩における功労者六石の墓 (日光寺)

やがて訥庵・教中の投獄事件が発生。彼らを救おうとする中、六石も閉門から四月に開放され、師友を救うために奔走します。そのかいあって釈放された二人は、しかしすぐにこの世を去ってしまいました。

一方、家老・間瀬和三郎に藩の難局打開のため山陵修補を進行、それが受け入れられたこともあって、一八六三(文久三)年に中老職を命じられました。そこで藩のために腕を振るった六石ですが、翌年に宇都宮藩を訪れた天狗党に対して同情的な立場をとったため、またも解任されてしまいました。

その後、藩主の転封事件に際しては撤回のために尽力。戊辰戦争では藩主が不在の中、新政府側へと藩論をまとめ上げました。維新後は宇都宮藩権大参事、司法省小判事を務めるなど活躍を続けた六石です。

が、一八七七(明治十)年には病のために公職を辞し、宇都宮で私塾を開いて後進の育成にあたり、一八八二(明治十四)年に亡くなりました。

毀譽褒貶、浮き沈みの多い人生は、信念を貫く姿勢故だったといえるでしょう。藩から半ば疎まれつつ、肝心な時には頼られてきた六石は、家老・間瀬とともに、幕末の宇都宮藩の舵取りを担ってきた存在感のある政治家なのでした。

これまでたびたび登場した六石(りくせき)は、一八二三(文政六)年に宇都宮藩家老安形半左衛門通義の子として生まれました。名は信緝(のぶつぐ)、晩年は勇記と名乗りました。六石は号です。幼少から勉学を好んだ六石は、21歳の時に江戸へ脱藩し、菊池教中のところで触れた佐野屋に身を寄せます。そこで紹介されて大崎訥庵の塾に学び、また教中とも親交を深めたことが、その後の六石の人生を左右します。

その後伊豆で塾を開くなどしましたが、やがて呼び戻され一八五六(安政三年)年に宇都宮藩の勘定奉行となります。翌年、安形の姓を縣に改めました。教中の新田開発に協力

数々の賞を受賞しました。そのため工場を訪れる参観者も引けを切らず、岩倉具視、大隈重信など政府高官をはじめ、前米国大統領グラント将軍も見学に訪れました。模範的な工場であったことが、これら逸話からもうかがい知れます。

六石像 (栃木県立博物館蔵)



郷土のために奔走した政治家

六石

一八二三(文政六)年、
一八八二(明治十四)年、
宇都宮藩士

どんな土地でも、歴史がある限り、それを作ってきた人物が存在します。有名無名に関わらず、そんな人たちが流してきた汗のおかげで、今の宇都宮があるのでしよう。今回の特集で興味をわいた方は、ぜひ郷土の歴史を探索してみてください。きっと第二、第三の教中や迂叟や六石に出会えることでしょう。